

《論 説》

「繁栄の10年」と合衆国北西部日本人社会

——『大北日報』の記事と論説に基づく概観——

黒 川 勝 利

はじめに

1920年代は合衆国における日本人排斥運動が頂点に達した時期であった。日本人移民社会の総力を挙げた努力も空しく、排斥運動の結果として制定されたカリフォルニア州やワシントン州の外国人士地法は、当時の日本人移民社会の経済に大きな打撃を与えた。1924年のいわゆる排日移民法の衝撃もまた大きかった。その後も、排斥諸法、諸条例強化の動きや、時には暴力、脅迫、公共施設や就職の際の差別が日本人社会を脅かし、また憤慨させた。それゆえ日本人移民に関する文献の多くは、1920年代の動向に関する頁のほとんどを、日本人排斥問題に割いてきた。

しかしながら、翻って合衆国の国民経済の発展を概観するならば、1920年代は「新時代」New Era、「黄金の20年代」Golden Twenties、さらには「繁栄の10年」Prosperity Decadeなどと呼ばれる、合衆国史上まれに見る「繁栄」の時代であった。

しかも、単なる「繁栄」の事実以上にこの時代を興味深いものに行っているのは、自動車、家電を典型とする耐久消費財の普及である。第二次世界大戦後に、日本では高度経済成長期に、いわゆる先進資本主義国で一般化した高度大衆消費の社会は、一時は「アメリカ的生活水準」American Standard of Life、「アメリカ的生活様式」American Way of Lifeと形容されたように、まずもって1920年代のアメリカ合衆国で実現した。

もちろん、この時期の「繁栄」には留保をつけることも可能である。「富は国民の間に広く分配されている」というクーリッジ大統領の有名な演説にもかかわらず、その果実をもっとも享受したのは高所得者層であった。1920年代に合衆国国民の経済格差は著しく拡大したのである。耐久消費財の普及は、たしかにフォードT型車に代表される生産性の上昇に基づく価格低下と賃金上昇の結果であったが、同時に消費者信用の普及にも支えられていた。実のところ多くの国民が当時の「アメリカ的生活水準」に達していなかったという事実は、研究者によって繰り返し指摘されている⁽¹⁾。言うまでもなくその比率は、黒人をはじめとするマイノリティ集団において特に高かったであろう。

しかしながらこれらの集団もまた、合衆国に住んでいるかぎりにおいて、1920年代の「繁栄」を受け止め、進展しつつある大衆消費社会への適応を迫られていたのである。もちろんその影響は、その属する集団の経済力、固有の文化、白人社会との関係などに応じて異なっていたが。

本国にはるかに先駆けて「繁栄」と高度大衆消費社会に直面することになった日本人移民のコミュニティの場合はどうだったのであろうか。彼等は1920年代に、強固で執拗な日本人排斥運動、その結果としての過酷極まりない排日諸法、諸条例に苦しみつつ、どのように当時の合衆国経済の「繁栄」を受け止め、あるいは「アメリカ的生活水準」を享受することができたのであろうか。耐久消費財、特に自動車の普及と生活必需品化は、彼等の生活にどのような影響を及ぼしたのであろうか。

その当時ワシントン州のシアトルで発行されていた邦字紙、『大北日報』の記事、特に1面に掲載されていた論説と4面に掲載されていた中島勝治（ペンネームは悟街、以下悟街と記す）の随筆「別口雑記帳」を参考として、したがってシアトルを中心とする太平洋岸北西部の日本人移民コミュニティに焦点を当てながら、このような問題を吟味するのが、本稿の目的である⁽²⁾。

一 日本人コミュニティと「繁栄」

『大北日報』の記事や論説を一読してやや意外に思われるのは、シアトルの日本人コミュニティが1920年代の合衆国の「繁栄」を「繁栄」として実感した期間が、きわめて短かったという事実である。すなわち1920年代のほとんどを通じて、シアトルの日本人コミュニティの事業家の多くは当時を不況であると感じ、あるいは少なくともそう嘆いて止まなかったのである。

日本人コミュニティで多くの事業家が現在は不況であると考えていたことに、理由がないわけではない。言うまでもなくまず挙げられるべきは、排日運動とその結果として制定された排日法、排日条例である。周知のように、1921年のワシントン州外国人土地法（及び1923年の修正法）はワシントン州の日本人農業者を恐慌状態に陥れた。彼等の購買力に依存するところの大きかったシアトルの日本人地域にも、もちろん悪影響を及ぼしたのである。また1924年のいわゆる排日移民法は、日本人移民の入国を拒否したのみならず、外国人土地法と相まって、合衆国に見切りをつけた人々の日本への帰国を増加させた。これももちろんワシントン州の日本人移民の購買力を減少させた⁽³⁾。後者はまた、日本人のみならず南東ヨーロッパ系のいわゆる新移民の合衆国北西部への移住を減少させることによっても、シアトルの日本人地域のビジネスに悪影響を及ぼした。1927年4月23日の「別口雑記帳」で、中島悟街は次のように嘆いている。

◎日本人は減つた、確かに減つた、購買力は減つた、確かに減つた、購はうとする人が少なくなるのに、賣らうとする店が同じ数なら誰れかが倒れる

◎その上、大打撃を同胞街に興へたものは南歐移民が来ないことだ、新移民法による彼等の入国定率は誠に僅かなもので、ニューヨーク港に着くや直ちに東部で消化される

◎中部諸州ですら、南歐移民労働者の缺乏で非常な困難を感じ、農園の廢頽を告ぐてゐるに西北部に一つ子一人來やう筈ない、新手が入り込まないから、労働能率の少ない、購買力の貧弱なヨボヨボのおぢいさんのみが残る⁽⁴⁾

第2の理由は第一次世界大戦期の好景気である。

戦時のブームはもちろんアメリカ経済全体に共通する現象であったが、造船所を抱えたシアトルの繁栄は格別だった。日本人地域もその恩恵を十二分に享受した。フランク・ミヤモトは次のように述べている。

このこと（第一次世界大戦の勃発と合衆国の参戦）がシアトルにもたらした造船業の活況は、その結果としてまた労働者の大量流入と最高の賃金をもたらした。日本人にとってこのことはホテル、ダイワーク、及びレストランのような彼らの小営業のすべてにとっての大きな需要を意味していた。同時に日本人農民の穀物価格もピークに達した。コミュニティに対するその影響は強烈だった⁽⁵⁾。

戦時のブームはもちろん平和の到来によって終わった。戦後不況は合衆国に一般的であったが、ブームで膨張したシアトルを中心とする地域においては、他の地域にもまして深刻であった。実際、シアトルの経済指標の多くが第一次世界大戦期のレベルを回復するには、長い期間を要したのである。1919年に4万人を超えていたシアトルの製造業労働者の数は、「黄金の20年代」の頂点である1929年においてなお、2万3,000人に過ぎなかった。製造業付加価値額はそれぞれ1億2,500万ドルと9,700万ドルである⁽⁶⁾。

しかも、打撃はシアトル経済一般よりも日本人地域において一層大きかった。日本人地域では、戦時ブームでシアトルに流入した不熟練労働者を主たる顧客とするビジネスの割合が大きかったからである。加えて日本人移民コミュニティでは、戦時ブームを一時的なものと考えて戦後に備えることが、また戦時に急拡大したビジネスを「平常への復帰」return to normalcy に応じて縮小することが、農業から日本人を閉め出した外国人土地法の影響もあって、白人社会以上に困難であったように思われる。悟街は1928年12月26日の「別口雑記帳」で次のような商店主たちの会話を紹介している。

■『戦争時代の景気に何をやつても儲かつたので、商賣人は俄かに増加し、皆んなが羽頂天になつたが、戦争が済んで購買力が減つても、商賣人の数は減らない、結局五人のお客を十人で引つ張り風にしてあるから儲かりつこない』⁽⁷⁾

1926年と1927年については、ランデス市長の廓清政策もまた日本人地域の商店の不況感を強めた。合衆国の大都市で最初の女性市長として登場したランデス Bertha K. Landes は、前市長ブラウン Edwin J. Brown のオープンタウン政策によって乱れに乱れたシアトルの風紀の肅正に乗り出した⁽⁸⁾。

当初、日本人コミュニティの指導者の多くはランデスの当選を歓迎した。白人住宅地域と比して住民たちの抵抗が小さかったためもあってか、日本人地域近辺がオープンタウン政策の下で売春業者の巢窟となり、児童の教育に悪影響を及ぼすとともに、日本人地域と住民のイメージを低下させるという懸念があったからである。

市長選挙の投票日直前、『大北日報』は一面トップの論説で、前市長ブラウン時代の「繁栄」と同時に風紀紊乱を回顧するとともに、「我々日本人としては何よりも我々住宅区域から醜業婦を立去らしむる政策を執る政治家の現出することを希望す」と述べていた。また投票直後の3月17日の論説で

は、「ランデス夫人就任後のシアトルの風紀は現在よりも大に廓清せらるゝであらう、ブラウン時代には、日本人社會から、その住宅地區内の醜業婦を立退かしむるやう誓願しても、醜業婦の居るといふ證據を示せなどと不親切な施政ぶりであつたが、ランデス夫人市長は、斯る場合には早速其誓願を聞届け、充分盡力することゝと豫期せらる」と、新市長にかなりの期待を寄せていた⁽⁹⁾。

悟街の考えも同様であつて、廓清政策の日本人ビジネスへの打撃が明らかになった6月中旬の「別口雑記帳」でも、なお次のように主張していた。

□今年は、たゞさへ不景きの今日此頃、ランデス市長の廓清政策に怖れて、魑魅朦朧、俄かに姿を隠し、不夜城が急に暗になつたから、阿那ものや袁彦道を得意にしてゐる向は、火の消えたやうに寂びれるのも道理
□併し、それも一時、廓清されたタウンは、それだけ堅實に發達して行く、アンダーグラウンドのみが景きでない、……

□同胞街は女郎や、ムーンシャイナーの恩恵によりて、僅かに立行くやうな不健全なものではない、この際、禁物は不景気な顔をしてお客を逃がすことだ店の主人から、チャニターに至るまで、不景きを噛み殺ろして景気よささうな態度を持つことだ、その心理状態は確かに景気を左右する⁽¹⁰⁾、

しかしながら日本人地域のビジネスは、悟街の考えた以上に「女郎やムーンシャイナー」といった連中に依存していたのである。翌年10月8日の「別口雑記帳」では悟街は次のように書いている。

■『景気はどうですね』とホテルの主人に聞くと、彼れは悄然として『だめです、女市長が頑張つてゐる間は、シヤトルには見込はありません、選挙を待つより外に方法がないでせう』と答へた

■實にシヤトルは女市長に崇られたもので、不景気といへば女市長の罪、ブートレッガーが殖へると女市長の罪、ランデス女史は呪はれてゐる

■日本人間で廓清運動の先鋒を承りキリスト教會の重鎮たる某洋食店のボスマだが、最早や愛想をつかして、『ランデスはだめだ』と愚痴るに至つては、同胞社會に於ける女市長の人気も推測される⁽¹¹⁾

このように、当時の『大北日報』の記事を拾つていくと、「繁榮の10年」、あるいは「黄金の20年代」といった、1920年代という時代についての一般的な印象とはやや異なつた様相が、シアトルの日本人コミュニティに関して浮かび上がってくるのである。

そのような状況の反映と思われるのが、1927年10月3日の『大北日報』巻頭の論説である。「果して繁昌か」と題されたこの論説は、当時の合衆国經濟の「繁榮」それ自体を疑つてかかる。そして、白人向けの一般新聞が合衆国經濟の「繁榮」を宣伝しているのは、実は当時の共和党政権を利するための策略ではないかと主張するのである。

近頃日本人社會は不景気だといふ、其れはシヤトルもポートランドも桑港も羅府も同様だといふ、然かし白人社會は景気がよいといふ

新聞紙の報ずる所では、米國一般に景気が良い、商賣は繁昌農業は豊作、勞働者にはポケットに金がある

といふ

が新聞紙上の報道は、割引をして聞くことが必要である、何となれば、普通に新聞紙上には景気が悪くなりかけると、早速景気がよい々々と書く癖がある之は人気を落とさぬやうにする策略かと思はる

特に近頃は、來年の大統領の選挙のかけ引きから、色々政略上の言論が流布せらるゝから、其種の説に對しては割引きして聞かねばならぬ

……

要するに繁盛は、新英吉利州の何處かから始まり、ピッツバーグの西方數哩の處で終はつて居るのである
読者若し之を疑はゞ、而して自から其真偽を知らんと欲せば試に農園を買つて農業をやつて見るがよい、活計が出来るかどうか、自分で経験するがよい、或はシャトルへ出るか、又は其他何れの市なりとも普通の市へ赴き、仕事口を捜がして見るがよい⁽¹²⁾

もっとも、ここまで紹介してきたような記事や論説は、『大北日報』の所在地や読者層を反映して、主としてシアトル市内の日本人のビジネスを中心に景気、不景気を論じていた。視点を日本人労働者に移すとやや異なる状況が見えてくる。

日本人労働者もまた1920年代に新たな問題を抱えていた。当時最大の問題となったのは低賃金で働く若いフィリピン人労働者の出現である。1928年に悟街は次のように書いている。

■丁度同胞の労働界は、一難去つて、一難來の有様、排斥の火の手が鎮まり、賃金も所謂『毛頭さん並』とまでに進み、妻子に温いホームも作り、老後の貯蓄も心掛けやうとする矢先に、又候強敵が出現

■昨今フィリッピノが雲霞の如く押よせて來る勢いは、實に物凄いやうだ、いづれも血氣盛りの若い衆、數に於て日本人は壓せられ、ただ一―指をくはへてその襲來を眺めているより外に方法はない

■……

■フィリッピノ來るの恐怖は丁度明治三十二三年の頃、日本人來るの恐怖を白人労働者に興へたと同様だ、當時日本人は一弗の日給を争つて鉄道働きに行つた、請負人のコンミツション大枚五仙、手取り九五仙で團子汁をすすつたのだ

■一弗が二弗、二弗が三弗の日給にこぎつけた熟練労働者は再び新參の未熟練労働者の安賃金で、その根底を危ふされる立場になつてゐる、そして同じ人種の雇主ですら、日本人を退けてフィリッピノを歓迎する時代になつて來た⁽¹³⁾

實のところ、フィリピン人労働者の移住は、東南欧系移民の顧客を失つたシアトルの日本人ビジネスにとっては、恵みの雨であつた。しかしながら、すでに高齢化して労働能率の低下しつつあつた一世の労働者にとっては、彼等の若さと低賃金が深刻な脅威となつたのである。当時の『大北日報』の記事、論説は、「別口雜記帳」も含めて、繰り返し繰り返しこの問題に触れている。

もっともこの問題は、1920年代の日本人労働者の賃金や労働条件が、昔に比べて大きく改善しているという事実の現れでもあつた。

当時のワシントン州における日本人労働者の職場としてもっとも重要だつたのは、森林地帯の製材

業とアラスカ・キャナリーであった。『大北日報』にももちろん彼等の状況についての多くの記事が掲載されている。現場の労働者が寄せた様々な意見や随想も紙上に少なくない⁽¹⁴⁾。それらを一読すると、いずれの業種の労働条件も、さらには生活の環境も、なお厳しさは否めないとは言え、かつてと比べるとかなり改善していることが明らかである。

かつては「頭なし」と呼ばれる賭博と前借に追われる労働者が多かったアラスカ・キャナリーでは、このような労働条件の変化にともなって、学費稼ぎの学生たちの姿が目立つようになった。悟街の子供たちも、やはり夏になると学費稼ぎにアラスカに出かけた。悟街の大北日报社からの給料だけでは苦しかったのである。1925年7月3日の「別口雑記帳」は次のように始まっている。

▼ 昨朝、二人の息子がアラスカ、キャナリー労働に行くを見送りに、第二號棧橋に行く、アラメダ號は貨客満載の盛況で、甲板も埠頭も人で一杯

▼キャナリー行きは、華州大學を先頃卒業した西尾君がフオーマン、渡邊巖君兄弟や、シカゴ大學文學士の板東君や、華大の學生が九名、それにフキリピノ大學生を加へると廿餘人

▼見送り人の内に、キャナリー請負業の某々二氏がゐ、船の出るまで半時間のタイムに、同胞の労働問題が話題に上はり、友人揃ひの批評はなかへ面白ひ…、

▼『何と豪いものです、今年のキャナリー、シーズンに、アラスカに行つた大中學の同胞青年は二百人を數へてゐる、この分が進むと、二三年たつと五六百人になる景況…』⁽¹⁵⁾

このように日系二世の青年たちの夏のアラスカ行きが普通になった状況を、アラスカ・キャナリーにおけるアジア人労働者の組織化を研究したクリス・フライデイは「成人への通過儀礼」*a rite of passage into manhood* と形容している⁽¹⁶⁾。

製材業の賃金についても同様なことが言える。村山裕三の研究によれば、合衆国北西部における日本人と白人労働者の賃金格差は1910年頃までに大部分の分野で解消した⁽¹⁷⁾。この事実は『大北日報』に寄せられている多数の論文や手記によっても支持されている。

しかも、すでに述べたように1920年代に白人労働者の賃金は着実に上昇した。もちろん一直線というわけではない。たとえば1924年に合衆国の景気は一時的に落ち込み、失業率が上昇した。賃金も下落したようである。このころ悟街は、次のような警告を日本人労働者に発している。

■同胞は未だ戦争タイムの労働黄金時代を夢んで、いつまでも雇主は叩頭して雇いにくるものと心得てゐるが、米國産業界の不況は、労働口を極度に収縮し、しかのみならずメキシカンフキリツピノの如き、低賃金に甘んずる労働者の數は、近來非常に増加し、更らにまた白人労働者の賃金も非常に下落してきた⁽¹⁸⁾

しかしながらこの景気後退は短期間で終わった。要するに、変動しながらも合衆国の「繁栄」は続き、結果として1920年代の白人労働者の賃金は上昇していったのである。これは合衆国北西部でも同様であった。1927年4月30日の『大北日報』の論説は、当時のシアトルにおける労使関係、労働者の状態について、「シアトル地方について之を謂ふも、労働黨の無勢力、曾ては幅を利かしたるアイ、

ダブルユー、ダブルユーの徒の屏息は、資本家万歳の世の中のやうではあるが、以前よりは労働賃金も高くなり、労働状態も改善され労資協調の實あることも亦事實である」と記している⁽¹⁹⁾。

このように白人との賃金格差が解消したという事実が、1920年代に合衆国北西部に移住してきた低賃金のフィリピン人労働者との、日本人労働者の競争を不利にした大きな理由であった。したがってこのことは同時に、職を確保している限りにおいて、日本人労働者が1920年代の「繁栄」の成果を、白人労働者同様に享受できたということをも意味しているのである。

年により、あるいは個々の経営によって違いがあったにしても、日本人農家の経済状態も一般に改善したようである。合衆国北西部日本人移民史の代表的研究者である村山裕三と坂口満宏は、いずれも、1920年代後半にワシントン州の日本人農家は外国人土地法による大打撃から順調に復興しつつあったと、結論している⁽²⁰⁾。坂口は『大北日報』の記事をその根拠の一つとして引用している。私も農業経営の状況を伝える『大北日報』記事を一読して、坂口と同様の印象を受けた。

このような周囲の状況にもかかわらず、シアトルの日本人地域のビジネスだけが不振を続けていたのであろうか。

実のところその当時から、シアトルの日本人事業家たちの不景気に関する言説は真実ではない、少なくとも不況が誇張されているという批判はあった。『大北日報』の論説もそのような批判を行っている。もっとも、先に述べたように事業家たちに同調して、ともに不況を嘆いた論説も少なくないのであるが。

もっとも頻繁に見られる批判は、不景気を嘆く商店主たちは第一次大戦期の異常な好景気の思い出に囚われ過ぎている、というものである。たとえば1927年元旦の『大北日報』は、年頭に当たっての景気づけもあろうが、次のように主張している。

日本人は、能く不景気々々といふことを口癖にするも実際の事情を冷静に観察する時は、彼等が口にする程に不景気ではないといふ

其れを説明する者は曰ふ、日本人の多くが、不景気といふことを口にするのは、現在の自分の営業が戦争当時の如き、減多に無い時の好景気に比すれば不景気であるといふ意味で、其投資額に對する利子と之に加ふるに自分の勞力に對する報酬とを合したものを以て、普通の利益とし、之れ程の利益を擧げ得たならば、其れで商賣は普通の景気であつたと計算するならば、一九二六年の景況は、悪い方ではないといふ

本年は、昨年よりも好況であるといふ豫想であること、上述の通りであるから、大に氣を勵まして、事に従ふべきである⁽²¹⁾

悟街の「別口雜記帳」にも同様の趣旨の文章が多い⁽²²⁾。多くは不況を嘆く同胞への叱咤激励であるが、同年11月2日の「別口雜記帳」では具体的な数字も挙げている。

■『同胞は不景気にて候と金を蓄め』 川柳子の曰ふが如く勤勉な同胞は、全くこぼしながら蓄め込んでいる、せつせと送金の残額四百万弗

■この数字は十月十日現在の銀行預金の締額、日本商業銀行が百八十八万弗、住友銀行が百十一万弗、東

洋銀行が九十一万弗といふ内譯

■無論、この預金の内には日本人以外のものも、多少含まれてゐやうが、これ以外横濱正金銀行や、郵便為替を通じて日本に送り、蓄へられてゐる金額は蓋し莫大なものだ⁽²³⁾

このように見てくれば、シアトル日本人コミュニティの不況論議は、やはりかなり誇張されていたように思えるのである。

たしかに、1920年代の北西部日本人社会は、なお多くの問題、不安定な要素を抱え込んでいた。農家には摘発の危険、外国人土地法の更なる強化の不安があった。製材業労働者には、賃金その他の労働条件が好転したとはいっても、やはり将来への不安、さらに家族持ちの場合には子弟の教育への不安があった。同一職種における白人労働者との賃金格差が解消したとしても、当時の日本人労働者の就ける職種や職場には限りがあった。森の中の製材所は都会の大工場ではないのである。もしも彼等が資本を蓄積して自営業へ転身したならば、それはシアトルの日本人地域における顧客獲得の競争を一層激しくしたことであろう。そしてそのシアトルの自営業者たちは、実態はそれほど悪くなかったにしても、自分たちが不況に苦しめられていると感じ、あるいはそう嘆き続けていた。

とはいえ、総体としては、日本人移民の多くもまた、「黄金の20年代」の繁栄に均霑して、いちおう着実に合衆国における地盤を固めつつあった、と考えて差し支えないであろう。これが彼等の、当時の世界においてはきわめて「アメリカ的」な生活の象徴であった、自動車をはじめとする耐久消費財の購入の基盤になったのである。

二 自動車と日本人コミュニティ

1920年代の合衆国を象徴する耐久消費財は、自動車と家電、なかんずく自動車であった。1913年に50万台弱であった合衆国の自動車生産台数は、1920年に223万台、1925年に427万台、1929年には536万台を記録した。これは当時の世界の生産台数の85%に当たる。合衆国は世界に先駆けて、一般民衆が自動車を所有できるような時代に突入したのである⁽²⁴⁾。

ここで結論を先取りしておくならば、自動車の普及は日本人地域においても同様であった。1926年6月23日、及び1929年4月13日の「別口雑記帳」において、悟街は次のように述べている⁽²⁵⁾。

□メイン街を歩るいた人は、誰れしも自動車の多いのに驚く、其数の多いのと、高價のものがあるのと、金目にしたなら餘程のものだ、之れを奥田さんのフォードに乗せて貰つたことを光榮とし、友人に語つた當時に比すると、今昔の感に堪えない……、

■「メイン街あたりに火の車が殖えた、同胞の収入は増加せず支出も減じないのに、自動車ばかり全盛とは思ふ現象だ燃へるはインゼンの内側ばかりぢやなさうだ

■と、メイン街の中程に立留まつた或る心配家は長嘆息を洩らしてゐた、實際いつの間にか同胞の自動車

は殖へ、しかも古フォードは新シボレーに代わり、シボレーはビユイクに、面目を改めてゐる

このような状況は、言うまでもなく当時の世界にあつてはまさに合衆国に固有の現象であつた。当時の日本の一般民衆にとって、自動車はまったくの高嶺の花であつた。シアトルで異色の文化人として活躍し、当時は日本に帰っていた詩人・画家・彫刻家の佐々木栄多（指月）は『大北日報』への寄稿文の中で次のように書いている。

昨日の文士 菊池寛がフォードを一台買へば、今日はもう文壇の大御所と云はれる——わが大北の太郎作などは、パツカード、ストライト、エートの外に自動車なら、がたくりながら二臺も持つてゐるのだから、日本に来れば、大大御所でなければならぬ、尤も日本の文士で自動車を持つてゐるやつは、菊池の外には一匹もゐない、みな太郎作以下なんだ。——そのくらゐ日本では自動車は尊いのだ⁽²⁶⁾。

「太郎作」というのは大北日報社主、竹内幸次郎のペンネームである。いかに『大北日報』が少数の零細新聞であつたとしても、社主であるからには自動車3台を所有していても不思議はない。しかしながら自動車の普及は、もちろんもっと貧しい層にも及んでいた。当時『大北日報』紙上で展開された労働運動の擁護者大江源太郎と保守派の論客繁田椿歳との論争は、大江のような製材所の労働者の間においても、自動車の所有が贅沢とは言えなくなったという、当時の合衆国の様子を物語っている。

▲氏は『労働者はパンを求めて石を與へられてゐるものではあるまいか』といはれてゐる部分的には左様のことも潜在するであらうサリナがら現在の米國に於ては二千二三百萬臺の自動車は活動してゐることを如何に見られるか假に米國人口毎五人を一戸とせば米國に於ては毎戸に一臺の自動車は所有して居るのであるこの多數の自動車は悉く資本家の専用物にて労働者は望んで得べくもないとは大江氏もいはれぬであらうパンを求めて石を與へられる程無力なる労働者が半贅澤物たる自動車を所有するとはオカシイ（繁田）⁽²⁷⁾

▲笑談ぢやないよ労働者の失業問題と自動車とは一体どんな關係があるかそれに又労働者が給料の前借をしてボロ自動車の一つくらゐ買った所で大した自慢にもならぬではないかそれはある意味において米國の労働者は他國の労働者に比して物質的に恵まれて居るとも云へるが一面から見れば又それだけ生活程度の膨張に苦しむつゝ、あるとも言へるではないか（大江）⁽²⁸⁾

それでは、このような自動車の普及は当時の日本人移民社会にどのような影響を及ぼしたのであろうか。

『大北日報』の記事を拾ひ読みしてまず目につくのは、事故の発生とそれへの注意喚起である。急速な自動車の普及に対する環境整備と安全教育の立ち後は、もちろんワシントン州においても例外ではなかつた。当時の日本人移民社会では児童が大きな比重を占めていただけに、父母の心配は大きかつたと思われる。

若者たちのいわゆるジョイライドも大人たちの眉をひそめさせた。二世のダンスパーティにすら抵抗を感じた一世の多くは、自動車が可能にする自由に青年の風紀を一層紊乱させる可能性を見たのである⁽²⁹⁾。

自動車の普及が日本人コミュニティの経済状態に与える影響について、当時の識者の多くは警戒的だったように思われる。1927年6月の「別口雑記帳」で悟街は次のように述べている。

■同胞の商業界が不況なる原因も、確かに自動車の崇りと南歐移民の移入途絶とにある、メイン、ヂヤクソンあたりにずらりと並び、同胞住宅の前に置いてある自動車だけでも、非常なる金高だ

■ただに車の代價のみでなくギヤスリン代、油代、修繕費、パーツ代、グラーザ料と積つて見れば、澤山の金は従來の生活費以外に出る、即ち限りある収入のものは、それだけの金を食料や被服費や、家賃から天引せねばならない

■その上、自動車あるがために、遠方に行つて金を遣ふ、以前なら客足は、チヤンと極まつてゐたが、今では客足に車がついて勝手に安賣をさがし遣はるグロッサリーで買った野菜一束すら、ピクニックの帰りにハイウエーで買入れることになる⁽³⁰⁾

合衆国経済を全体としてみれば、自動車産業の発展はもちろんプラスであった。自動車産業は、広範な関連産業と相まって、1920年代の合衆国の「繁栄」を支えた原動力であった。しかしながらシアトルが、ましてやシアトルの日本人移民社会が、デトロイトのフォードやゼネラル・モータースの自動車工場の労働者の消費によって潤うことはなかった。すなわち、北西部の日本人にとって当時の自動車は、東部からの輸入車に等しかったのである。

もちろん、シアトルにも日本人が経営する自動車関連のビジネスが出現した。竹内幸次郎の『米国西北部日本移民史』に収録されている1919年6月末日現在の「シヤトル市営業状態調査表」には、「貸自動車業」3と「自動車保管業」10が記録されている。営業投資額は、それぞれ4万9,000ドルと7万700ドルである。1923年度の調査では、「自動車販賣」1、「貸自動車業」4で、投資額はそれぞれ2万5,000ドル、5万2,500ドルであった⁽³¹⁾。下って1929年の松藤久吾編『シアトル案内』では、「自動車関係業」として14経営、従事者数88人、投資額6万9,000ドルとなっている⁽³²⁾。この間1927年には、二世が経営するガソリンステーションが華々しく開業したことが、当時の「別口雑記帳」に記録されている⁽³³⁾。

とはいえ、シアトルの日本人コミュニティがこれらの自動車関連ビジネスによって得た収入が、自動車の購入によって流出した金額とは比較にならないくらい小さかったことに、疑問の余地はない。悟街はこのような状況を踏まえ、本節冒頭で引用した1926年6月23日の「別口雑記帳」の中で、「それだけ、同胞の身上は自動車に入れ上げた譯だ、デトロイトその他自動車市に吸ひ取られただけ、同胞のポケットは軽くなつたのだ」と嘆いている。

悟街はまた、複数の「別口雑記帳」において、自動車関連の費用が衣食住や教育など本来もっと重視されるべき支出の切り詰めを招いているという事実を、読者の注意を促している。このことは、自動車の普及が、耐久消費財の所有に限定されない、ある意味でより実質的な、あるいは基本的な「アメ

リカ的生活水準」の維持をかえって困難なものにしたかも知れない、という意味で注目に値する。

このような「アメリカ的生活水準」の獲得は、合衆国において日本人が白人と対等でありうることを認めさせ、排日運動の広がりに対抗するためにも重要であった。1927年5月4日の『大北日報』の論説は、そのような当時の日本人移民社会の指導者の認識を示している⁽³⁴⁾。

世によく『米國人生活の標準』といふ言葉が使用せらる、吾人は之を多く排日論者の口から聞いた、彼等が我々日本人を排斥する論拠の一に曰く『日本人は生活程度が低い、米國人生活の標準を崩す』云々

偕て然らば『米國人生活標準』とは如何、米國労働聯盟の大立者、デヨン、ミツチエルは曰ふ米國人生活の標準とは之を不熟練労働者について言へば、大約左の如き生活ぶりではなくてはならぬ

論説の筆者は、続いてミツチエルの説くところの不熟練労働者の生活の水準を解説する。それは豪華とは言えなくてもかなりゆとりのある衣食住を基本として、疾病時や老後のための保険、死後の遺族の生活保障の外、相応の娯楽、静養、少々の慈善、教養のための新聞雑誌の購読等をも含んでいた。それでは、我々在米日本人はこのような「米國人生活の標準」に達しているであろうか、と論説の筆者は自問する。

ミツチエル氏の言ふ所の、不熟練労働者の生活費なるものを今日の物價から割出せば、一個年に何程位か、従つて日々又は毎週若くは毎月の収入が何程でなくてはならない乎、計算を立て、何弗何仙、割出したむきもあるが、今の我々在留日本人にして現に今はやつて居る所の生活法が、上記の米國人生活標準に達して居る者が何程まで乎といふに恐くは多くはあるまいと思われる

もちろん、「はじめに」に述べたように、実のところ1920年代においては、白人の中にもこのような基準に達していなかった者が少なくなかった。論説の筆者はそのことも忘れてはいない。

尤も米國人にしても、不熟練労働者にして悉く上記の如き生活を営んで居る乎といふと、決して左様ではあるまいが、労働聯盟の理想は其處に存するのである

そして論説は、我々は金銭のみに左右されてはならないが、『米國人生活の標準』を実現することもまた重要である、と結論するのである。

考えて見ても、上記の如き生活は成程一人前の男と生れた以上は是非やつて行かなくては、獨立の男兒とは言はれまい、第二世が何とか、子女の教育が何とか、社會がどうの、教育が斯うのと云つて見た所で、先ず以上の如き生活が出来て居ないならば、お手元拝見と言はれた時に返へす言葉なく、何を言つても言行の一致せざる様に取りられて仕舞ふ

斯く論じ来れば、我々在留民が、金、金と言ふのも無理はない、我等に不足して居るものは恐くは金が一番であらう、尤も端正なる生活を営む為でなくして、金銭の奴隷となつて經濟に金、金と言つて日を送るこ

とは別である、此差別を辨へてゐることは大切である

合同鉱山労働組合 United Mine Workers of America の指導者ジョン・ミッチェル John Mitchel は、1920年代の合衆国を見ることなく、1919年に他界した。したがって彼の「米國生活標準」には、自動車の所有は含まれていないようである。しかしながら、彼の死後まもなく、合衆国は世界に先駆けて自動車が生活必需品となる社会に突入した。階級闘争か労使協調かをめぐる大江源太郎との論争では自動車は半贅沢品であると主張した繁田椿歳も、おそらくは合衆国への永住、定住を奨励していた当時の日本人社会の指導者たちへの批判を意図して、合衆国と比べて日本の長所を強調した論文の中では、合衆国では「嫌應なしに」自動車を購入しなくては生活できなくなった、という事実を指摘していたのである。

▼米國に自動車の多きは文明の豊富を示すものとしてほこるべき現象であらうか日本に人力車の存在するは文明程度の低さを語るものとして恥づべき世相であらうか日本にて電話の架設には幾千圓の金と幾ケ月のタイムがかゝり米國にては朝申し込みてその日の内に架設される日本内地の人よりこれを見ると如何にも便利にして文明の高きを羨まぬであらう

.....

▼されど吾人は深く思へて見るの必要を認むるそれは人力車を挽く人と自動車行人の精神上の苦楽が外形に現はれたる比例に準じて別れるであらうか吾人は否といふ斷じて否と決定する何となればアメリカでは自動車でなくてはならぬのであり日本では人力車たるとも差し支へないのであるアメリカで荷物の運搬に今日ワゴンやあるひは大八車を使用しては喰つて行かれない嫌應なしに自動車の使用をせまるのであるしからばとて各人は自動車を購むる資あり餘るにあらず

■多くは無理算段して手に入れてこれが支拂ひに胸をいためてゐるのである…⁽³⁵⁾

すなわち、自動車というかなり高価な耐久消費財の所有が1920年代の合衆国でアメリカ的生活様式のスタンダードになりつつあるという事実は、ミッチェル的な衣食住を中心としたより実質的で健康的な、しかしながら在米日本人でこれに「達して居る者が何程まで乎」と論説の筆者が自問したような『米國的生活水準』の享受を、一層手の届かないものにする可能性もあったのである。悟街はこのような傾向を次のように表現している。

■新フォードの賣出で、自動車界は前代未聞の競争を始めその競争は購買力を煽り、自動車乗りは益々殖へる、それと反比例にホームは次第に小さく貧弱な假住みになつて行く

■ギヤスリン代に追はれて、食糧を切りつめ、栄養不足の家族も殖へやう、購買力を奪はれ金を持つて行かれ、町のさびれともならう、ホームをオートに代る處に、現代文化の悲哀が見へる⁽³⁶⁾

実のところ、本節の冒頭で日本人社会における自動車の普及を示すものとして引用した1929年4月13日の「別口雑記帳」には、同時に次のような文章も含まれていた。

■或る二世のデリヴァリーマンがお米を届けに行つた。その家の前に立派な自動車が置いてあつたから、遊んでゐる小供に尋ねると『これはミーのパパのカーだ』と答へた

■首を傾けながらステップスを登つてケチンを覗くと、窓カーテンは破れ、床は落ちかけ、ストーブは赤鯛のやうにさび、何とも形容しがたい悪臭は鼻を衝き、ムッと胸が悪くなつた

■『こんな自動車を買ふ供（ママ）なら、安自動車に満足してその金を住居の改善に費したら、第一家族の保健にもよからう』と二世は華美な自動車と青ばなを垂らした栄養不良の子供の顔を見くらべて嘲つてゐた

もちろんこれは極端なケースであろう。悟街の脚色も少し入っているかもしれない。しかしながら、この逸話が当時の日本人社会、合衆国の一面を象徴していることも否定できないように思われるのである。

小括するならば、在米日本人社会はおそらく1920年代合衆国の「繁栄」をかなりの程度まで享受することができた。その成果は自動車のような耐久消費財の所有に現れている。すなわち在米日本人は本国にはるかに先駆けて、高度大衆消費の時代を体験することができたのである。しかしながら同時に、多くの日本人移民は、それとともに上昇していく、その意味で新たな「アメリカ的生活水準」のための支出に、収入の増加が追いつかないという現実にも直面していたのである。

ただしここで忘れてはならないのは、最初に述べたように、白人低所得者層のかなりの所帯も同様の状況にあったということである。これが合衆国の1920年代であった。

おわりに

1920年代も末期になると、シアトル日本人コミュニティの雰囲気はかなり変化してきた。周知のように、合衆国の1920年代は最後にバブルをもたらした。株式市場は上昇を続け、破局を予想しなかったアメリカ社会は「永遠の繁栄」に浮かれた。このような状況が日本人コミュニティにも波及したのである。日本人地域から不況を嘆く声が途絶えた訳ではなかったが⁽³⁷⁾、自信と楽観とが大勢を占めてきたように思われる。最後にこの時期の日本人地域の状況を概観することによって、本稿の結びとしたい。

1929年元旦の「別口雑記帳」で悟街は次のように述べている。

■何といつても、昨年暮れの景気は、同胞社会を大體に於て活かした、一時は白人側の不景気のおつき合ひに例の紋切形の文句「どうも不景気で」を並べたが、事實は近年にない上景気、先づお目出度い年を越して新歳に入つた

■誰れも儲けて呉れ、ば、同胞界はお目出度い、儲けた人が金を出し、仕事をする人が盡力し、そこに協力主義が実現さへすれば、同胞社会は改善もし向上もする

……

■時代は第二世に移つて行く、新年を迎える毎に、人も亦た新人を迎へねばならない、新しい人々は、漸く自分の立場、自分の責任、自分の抱負に自覚しかけて、大なる期待を以て新しい年を迎へたので、一九二九年は希望に充ちている、お目出たい歳だ⁽³⁸⁾

1929年に入ってもアメリカの好景気は続いた。日本人地域もまたその波に乗っていた。これは不況に喘ぐ日本と比べて真に対照的であった。6月24日の『大北日報』の論説は、「繁昌に注意の點あり」と過度の樂觀を戒めながらも、次のような文章で始まっている。

アラスカのキャナリーの季節になつたので、此頃市内から、ヒリツピンが、メッキリ減少した、日本人のアラスカ行きも、可なりに多い

莓摘みが始まつたので、女や小供まで、ドンタタ働きに出かける、農園仕事や、ソーミルの仕事も増加したから、人口がタウンから田舎へと移動する

黄金の流るゝ國と、日本でよく米國を形容して言ふが、比較的と言へば、左様に言へるだらう、米國は景気の良い國である⁽³⁹⁾

悟街はこのような状況を生かして将来に備えるよう同胞を説いた。次の文章は同時期に、同じく好況を伝えられる日本人農家に宛てた文章である。

■第一、この勢いに乗じて地主になることだ、第二世も追々成長し、立派な農家が殖へてきた、今日リース百姓の状態は余りに腑甲斐ない、たとへ五英加十英加でも、自分の物として、不動の根據を作るべきだ、それが先決問題

■リースをしても、五年十年は直ぐたつ、おまけに土地法の脅威は纏ひつき不安の念は身邊を離れない、適法に日系市民又は會社によりて、買取した土地は、不廉の地代もかゝらず不安もない

■土地を買入れ安定したいといふ希望は、同胞農家の心ある人の胸に湧いてゐるが、金の入る仕事は豊年でなくては、實現し得えぬ相談、そのまゝ、打過ぎてゐた向も多い

■今年は千載一遇の好機會、多年の希望や、理想を現實化するチャンスに向つてゐる農家は耕作物の農作を黄金に代へ、又更らに黄金を豊饒なる土地に、替へて確乎不動の地盤を作ることを忘れてはならぬ

■今一つは、土地の銀行と取引して、他日の資金融通の基礎を作ることだ、今日まで農家の苦んだ資金枯渴は、事情の分からぬ他所の銀行に情實的融通を求め、充分な目的を達しなかつたからだ、コミュニティー銀行取引は、土地に定着するものゝ必得べき重要事

■鼻息は荒い、その鼻息を將來永遠の發展に向けたものこそ農業の勝利者だ⁽⁴⁰⁾

しかしながら、好景気に浮かれた日本人の多くが、悟街の説いたように将来に向かつて堅実に投資したわけではない。ニューヨーク証券取引所の熱狂は、在米日本人をも巻き込んでいた。そしていわゆる「暗黒の木曜日」、10月24日の暴落が大恐慌の始まりを告げたのである。

シアトル日本人コミュニティの損失も大きかった。暴落直後の記事をいくつか紹介しよう⁽⁴¹⁾。

「暗黒木曜日」といはれた去木曜日の紐育株式市場の大暴落にて数十億弗といふ大損害で痛手を蒙つた者は数多い當地にても株式市場を中心に同胞の投資家は可なりに多く確かな筋の計算によるとブローカーに提供の敷金は五十万弗に達してゐるから今回の大惨落には少なくともその半額二十五万弗といふ大痛手を受けてゐると

『暗黒木曜日』の大荒しで、シアトル在留日本人の懐から、二十五万弗が消えて仕舞つたとの報がある二十五万弗とは全く大金、之だけの金があれば、國語学校の教室狭陰で、児童就學に不便をさせなくても済む、第二世の為に、昭和館を建て、やることも出来る、櫻を市に寄附するなどのことは、殆んど問題でないア、惜しい二十五万弗、これがアダ欲と不心得との結果であるかと思へば、アダ欲は慎しむべし、不心得はやめることとの感が起こらざるを得ない

我々同胞社会に投機をやるものが多くなつたのはツイ近頃からであるといふが最近運よく少しでも儲かる時はコンナよい金儲は外にない濡手で粟とは此事などと有頂天になるが實のところ先週木曜の諸株大暴落でシアトル同胞界の投機連中で約二十五万の損失になつたとの噂である

事實如何は之を知るに由なしだが又々昨日の大暴落で大々損失を重ねたといふから餘程の痛手を受けたものがあるに相違ない

しかしながら、この時点で暴落がアメリカ経済史上もつとも深刻な恐慌に繋がっていくことを予想したものは少なかった。暴落の影響が懸念された年末の商戦が予想外に良かったこともあって⁽⁴²⁾、多くの日本人はなお、日本人コミュニティの繁栄を祝い、将来への希望をふくらませていたのである。悟街もまた、同年最終号の「別口雑記帳」で次のように1929年を回顧し、1930年を展望している。

■今年、同胞社会で嬉しかつた事は、農業にも、商業にも、幾分か安定を見たことだ排日騒ぎにフテ腐つて、逃げ足になつた人々が、漸く我れに返つて一層度胸を据へ、腰を落付けにかかつたことだ

■農園方面を見ると、土地法の旋風で、一トたまりもなく吹き巻かれた同胞農家は、風の猛威よりも、風の音に驚いて逃げ出たものも尠なくなつたが、思つたよりも風は弱く、害が尠ないのに気がついた

■踏み留つた連中は、グツと腰を据へた、土地法の威力の及ばぬ日系市民に、所帯を代へ、前より數倍の力を揮つて、農園経営に取かつた、一度腰を落付けると、いい智恵が出る

■その結果は販賣組合となり日系市民の土地會社となり、農園改良となり、青年會館の設立となり、父母教師會の開催となり、農村の慰樂機關となり現れてゐる

■商業方面にしても、経営方針が半永久的になつて來た、今まで聞かなかつた長期リースのホテル経営者も出て來た、息子に譲る支度のストアも見へるやうになつた

■父子共同 兄弟合資のビジネスも現はれ、店といふ店で若い者の顔の見へないものは、殆ど稀れになつた、第二世は役に立たぬ、と罵るが、實際役に立つてゐるのが嬉しい

■……

■今年もお仕舞になつた、同じお仕舞でも、昨年のお仕舞よりも愉快なお仕舞だ、來年はもつと同胞社会に光明があらう⁽⁴³⁾

悟街の期待が裏切られたことは言うまでもない。合衆国全土と同様に、北西部の日本人社会もまた、冬の時代に入っていったのである。

註

1. さしあたり, Frank Stricker, "Affluence for Whom?: Another Look at Prosperity and the Working Class in 1920s", in Daniel J. Leab ed., *Labor History Reader*, Univ. of Illinois Press, 1985, p.306.
2. 近年, アメリカ史を消費の側面に着目して考察した研究が目立つ。その代表は常松洋, 松本悠子共編の『消費とアメリカ社会——消費大国の社会史』(山川出版社, 2005年)であろう。このような研究の多くは, アメリカ社会の主流である白人中産階級の消費の動向を吟味の対象としているが, もちろんそれに限られてはいない。たとえば秋元英一は『アメリカ20世紀史』(東京大学出版会, 2003年)の第2章10節, 「消費者資本主義の進化」の中に「エスニック・グループと消費社会」という項を設けて, 第一次大戦期から1920年代にかけての黒人社会の動向を紹介している。『消費とアメリカ社会』の松本悠子論文の中にも「移民のアメリカ化」, 「黒人と消費」という項目がある。本稿は, 杉浦直, 村山祐三, 坂口満宏等による合衆国北西部日本人移民社会に関する研究とならんで, このような消費の側面を重視する近年のアメリカ史の研究動向に刺激を受けている。ただし, 多くの研究者が重視しているように思われる「消費文化」の面にまでは立ち入っていない。本稿の考察は, 消費生活とそれを支える経済状況に限定されている。なお, アメリカ経済史の研究者では室谷哲が消費の問題の重要性を早くから強調していたと記憶している。室谷哲「経済過程分析からみた19世紀後半アメリカ」(『東京大学アメリカ研究資料センター年報』10号, 1987年), 31頁参照。
3. 当時の『大北日報』には一定期間の帰国者と入国者の数を比べて帰国者の方が多いことを指摘した記事が少なくない。たとえば1926年4月22日「月々減少してゆく米國在留日本人」, 9月23日「七月に入っても歸國者矢張り多い」, 1927年9月28日「矢張り多い歸國する人の數」, 1928年5月29日「三月も依然として歸國者の數が多い」。なお, *Historical Statistics of the United States* に見る日本からの入国者は, 1907-8年の日米紳士協定によって減少したとは言え, 1920年から1924年まではなお, 9,432人, 7,878人, 6,716人, 5,809人, 8,801人であった。しかし1925年には723人に激減し以後1952年まで1,000人を超えることはなかった。Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1970*, Kraus International Publications, 1989, Part 1, p.107.
4. 『大北日報』, 1927年4月23日。同じような内容の「別口雑記帳」は1926年3月25日号等, 多數ある。
5. Shotaro Frank Miyamoto, *Socaila Solidarity among the Japanese in Seattle*, University of Washington Publications in the Social Sciences, 11-2, December, 1939, p.65.
6. Roger Sale, *Seattle: Past to Present*, University of Washington Press, 1979, p.137. もちろんこれは製造業の数値であってシアトルの発展が止まったわけではない。シアトルの人口は, 1920年の31万5,312人から1930年の6万5,583人へとこの期間に16パーセント増加している。Richard C. Berner, *Seattle 1921-1940: From Boom to Bust*, Seattle: Charles Press, 1992, p.205.
7. 『大北日報』, 1928年12月26日
8. 「醜類三千人市外へ奔逃——前市長ブラウンの治下に跋扈したる博徒浮浪漢醜業婦及び酒類密賣の徒はランダス夫人が市長に就任せる以來廓清の聲に怖れをなし續々市外へ奔逃せるが警察署の見込にては其數三千人に及ぶといふ」(同上, 1926年6月14日)。
9. 同上, 1926年3月3日, 3月17日。
10. 同上, 1926年6月17日。悟街は投票日の前にも次のように書いていた。『家庭の主婦が, 否な子供の母が, 婦人の委員を選び婦人の市長候補者ランダス女史に訴へることが, 此際最善の策だ, 白人住宅区域でも, 斯かる風紀運動には, 婦人の運動は必ず成功してゐる, 子供を思ひ, 家を思ふ婦人連, 一ト奮発して新吉原の汚名を雪いで如何……』(同上, 1926年2月16日)。
11. 同上, 1927年10月8日。悟街は, 同年5月20日の「別口雑記帳」でも同様な商店主の嘆きを記録している。もっと

- も、悟街自身は後々までランダスを評価していたようである。1928年3月17日の「別口雑記帳」では次のように書いている。「いくら悪口を浴びせても、ランダス市長は一かどの女だ、十万以上の大きな市の最初の女市長が、あれだけ大過なくして難関を切りぬけた手腕は、之れを認めない譯に行くまい」
12. 同上, 1927年10月3日。
13. 同上, 1928年3月8日。日本人経営の店でもフィリピン人労働者が増えてきたようである。その直前の「別口雑記帳」の中で悟街は次のように書いている。「いくら共存共栄を唱へても日本人経営のレストランその他にさへ同胞の影を没し、雇用フィリッピノの數次第に増加しつつある傾向は、雇主に算盤がある以上、感情や理屈で真甲から責めることはできない」(同上, 1928年2月8日)
14. 同上, 1929年2月26日, シアトル日本人商業会議所は、日本による合衆国産木材輸入関税引き上げに反対する決議を日本政府に送付した。その時同時に送付した付属文書では、当時1,420人あまりの日本人がワシントン州で製材業に従事している、と主張しているという(同上, 1929年4月1日, 参照)。なお、かなり後のことであるが、1935年5月9日の『大北日報』の記事の中には「西北部日本人産業の主要なるものはアラスカ水産其の一、製材業關係其二、而して農業が其三であろう」という文章がある。
15. 同上, 1925年7月3日。また1927年9月6日の「キャナリーは學生の好き働き所」という記事を参照。なお、まったく別の問題に関する文章の中においてであるが、悟街は「アラスカ、キャナリー働きも近來改善されて、頭なしが次第に少なくなつた今日」(1928年4月14日号)と述べている。一方、より年少の少年や女性にとっての稼ぎ場は苺の農場であった。悟街はこれについて「ベリー畑の働らきは、シヤトルの婦人子供に取つて大の書き入れ、うまく行くと、一年中の書籍、小使、衣裳代を差引いても、尚ほ生活費の足し前が出来る程だ」、「又た、農園の方からいふと町の婦人子供は彼等が當てにしている摘み手、來ると來ないとでは、生産物の収穫に大なる影響がある、所謂持ちつ持たれつ双方の利益となる譯」と述べている(同上, 1926年5月19日)。なお、1926年5月24日の『大北日報』の求人広告に掲載されている「苺摘」の日給は3ドルから6ドルである。6ドルは熟練者を対象とした特例であろうが、3ドルも悪くはない賃金と言える。
16. Chris Friday, *Organizing Asian American Labor: The Pacific Coast Canned-Salmon Industry, 1870-1942*, Temple University Press, 1994, p.121.
17. 村山裕三『アメリカに生きた日本人移民——日系一世の光と影』(東洋経済新報社, 1899年), 91-112頁, 参照。
18. 『大北日報』, 1924年7月2日。なお合衆国における失業率の動向については, *Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1980*, p.135, 参照。
19. 『大北日報』, 1927年4月30日。
20. 村山裕三『アメリカに生きた日本人移民』, 181-182頁, 坂口満宏『日本人アメリカ移民史』(不二出版, 2001年), 304-305頁。
21. 『大北日報』, 1927年1月1日。「不景気と言うのは日本人の癖だ」という批判もあった。1927年6月27日の論説は次のように述べている。

我々シヤトルに在住する日本人の間には、景気がよいといふ聲よりも、不景気といふ聲が盛んであるは、一には斯くいふことが日本人の癖であると評するものがある

景気、不景気といふことは、人々の心の持方によりて其觀る所を異にする場合があり、同じ事柄ながら一人の眼には左程のことにあらずと見へても、他の一人には餘程の不景気に見へる場合もある

昨今日本人街にては、不景気だとこぼす者が多い、けれども市の他の部分に住する白人に聞いて見れば、其んなに不景気ではないといふもある

この論説はさらに、その頃発表されたシアトル経済に関する統計を紹介し、「此度の調査は、始めて精密に遺憾なく行はれたものであり、之によりてシヤトルが至極順調にかつ且つ大發展を遂げつゝあることを確實に知り得るので、或る期間人々が不景気など、噂をしても、俄かに其れに心を動ごかざるゝに及ばぬ」と結論している。

22. たとえば1927年9月19日の「別口雑記帳」には次のような文章がある。「今年は悪い年だとは、商賣人の一致した嘆声、然しその嘆声の内には、戦争の黄金時代に比して、悪い歳だという意味も含まれているようだ、少々欲が深過ぎる」。また同年12月13日には、「同胞実業界の不景気をかこつ心理状態の裏には、未だ戦争時代に泡沫銭を儲けた甘味が残つてゐる、甘味に馴れた舌の先が一吋とした砂糖味では、甘さを感じないやうに、常習的甘黨になり終せてゐる」、「夢から全然覺てしまへば商賣の立直しも、改革も出来る従つて來るか來ぬか譯の分らぬ黄金時代を待ばけなくて、平時の真面目な標準で行ける、夢が母国の事業界を渦に巻き込んでゐるのに、在留同胞の夢は時代後れだ、早く獲

- に喰はせて、改めて昭和三年の初夢を見るがよい」と述べている。
23. 同上, 1927年11月2日。引用を省略した箇所には次のような文章もある。「同胞の事業界不振の折柄にも拘はらず、蓄財は漸次増加し最近三ヶ月の増加、實に二十五万弗と註せられてゐる」。
 24. 宮崎犀一・奥村茂次・森桐郎編『近代国際経済要覽』（東京大学出版会, 1981年）, 111頁。
 25. 『大北日報』, 1926年6月23日, 1929年4月13日。「奥田さん」は奥田平治であろう。シアトル日本人社会の成功者であるから早期に自家用車を購入したのかも知れないが、東洋運送の社長であるから業務用の車かも知れない。彼は当初「八頭の馬と五臺の馬車」で運送業をはじめたという。竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』復刻版（雄松堂, 1994年）, 786頁, 参照。
 26. 『大北日報』, 1927年9月1日。佐々木指月については、伊藤一男『続・北米百年桜』復刻版, PMC出版, 1984年, 75頁と108-112頁に詳しい。
 27. 『大北日報』, 1928年12月20日。
 28. 同上, 1928年12月28日。なお、ワシントン州在住日本人中の自動車所有の割合について、私は今確認できる数値を示せないが、1927年3月1日の『大北日報』に掲載されている投書の中で繁田椿歳は、「七万の日本人在りといふ加州内の日本人にて一万二千臺以上の自動車を所有するといふ華州及び央州の同胞もこれに準じてゐると見る」と書いている。すなわち彼の推測では6人に1台である。ただしこのカリフォルニア州の数値の出所は示されていない。また、以下の『北米百年桜』所収の前田得一の手記から、1923年にはまだ製材業労働者の間で自動車所有者がめずらしかったのではないかと推察される。「ソーミルの社長はスコット氏だった。同氏宅で若林という日本人がコックをしていて、一九二三年のシボレーの新車を求めた時、社長は「若林は白人だ」といった。「なぜか」と聞かれると社長は「若林はカーをもっているからだ」とこたえたという。当時、有名な一つ話であった」（伊藤一男『北米百年桜』復刻版（PMC出版, 1984年）, 483-4頁）。もっとも、同じ頃に悟街は「別口雑記帳」の一部で、「自動車は最早や贅沢時代を過ぎて、人類交通の必要物となつてゐる」と書いている（『大北日報』, 1923年3月7日）。
 29. 『大北日報』, 1924年9月6日, 1926年8月14日, 9月8日等, 参照。
 30. 同上, 1927年6月28日。
 31. 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』, 819, 822頁。なお、1918年発行の『北米年鑑』第8号所収の北米日本人会によるシアトル在住日本人の職業調査によると「貸自動車業」5, 「自動車預所」2である。従事者は経営者、使用人を合わせて前者が13人、後者が7人、投資額はそれぞれ1万8,800ドルと3,500ドルであった（『北米年鑑』第8号（シアトル, 1918年）, 5頁）。
 32. 松藤久吾『シアトル案内』第2版（シアトル, 1929年）, 34頁。
 33. 『大北日報』, 1927年11月29日
 34. 同上, 1927年5月4日。
 35. 同上, 1926年8月11日。
 36. 同上, 1928年1月28日。
 37. たとえば、第2節で一部引用した1928年12月26日の「別口雑記帳」が店主のそのような嘆きを掲載している。
 38. 同上, 1929年1月1日。もっとも、その前年の1927年末から28年初頭にかけても、日本人地域の商店の売れ行きはかなり良かったようである。1928年1月4日の『大北日報』記事は次のように伝えている。「闇諒明けの新年と意外によかつた歳の暮れの賣行きに明かるくなつた同胞街は上景気に歳を送り幸先よき新年を迎へた人気は面白きものでまねき、忠兵衛さん、東洋魚屋その他のお正月盛物は夕方既に賣切の盛況であつた元旦には……同胞街には中々の賑ひで殊に昨年は御遠慮の獅子舞は勇ましいはやしで同胞街をねり歩きお正月気分を煽つた獅子の一人西村君は語る「今年ほど人気を引き立ち活き〱していた年は少ない屹度景気はい、でしようとほく〱喜んでいた」。
 39. 同上, 1929年6月24日。
 40. 同上, 1929年6月6日。
 41. 同上, 1929年10月26日, 28日, 29日。
 42. 同上, 1929年12月24日。
 43. 同上, 1929年12月30日。

“Prosperity Decade”, “High Mass Consumption” and the Pacific Northwest Japanese Community

The nineteen–twenties of the United States is known as the “Prosperity Decade” or the “New Era”. The people enjoyed the prosperity and the beginning of the era of the high mass consumption. For the Japanese immigrants in the Pacific Northwest, on the other hand, the nineteenth–twenties was the decade on the cross. Anti–Japanese movement by racists, especially the Anti–Japanese Land Act of Washington State, annoyed them very much.

However, they also were affected by the economic and social changes of the United States in those days. Though many Japanese businessmen in Seattle lamented that they were living through hard times, the economic situation of the Japanese people in the Pacific Northwest, in general, improved in the 1920’s. The possession and use of automobiles became common among the Japanese families as well as among Caucasians according to the articles on the *Taihoku Nippo*, *the Great Northern Daily News*, published in Seattle in those days, though it seems that the expenses for the automobiles placed burdens on the household economies of many Japanese families.